メッセージアウトライン
マタイの福音書2：1～12
「イエスと東方の博士たち」

[1-2]「イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。』」

「ヘロデ王の時代」ということばはこの福音書中、イエス誕生の年代を示す唯一の手掛かりである。ヘロデ王はBC4年に死んだことが歴史的に知られている。そして16節にあるように、博士たちからイエス誕生の時期の情報を聞き、「ベツレヘムとその周辺の二歳以下の男の子をみな殺させた」とあることからイエスはこの時、二歳くらいになっていたということが推測される。この推定に立つと、イエスの誕生はヘロデの死より少なくとも二年ほど早く、BC5、6年ごろということになる。

博士たちが出発した「東の方」とはどこか。彼らの持って来た贈り物(11)から見て、アラビアとする者、星占いの盛んであったバビロンとする者、あるいはペルシアとする者等があるが、いずれかに決定することはできない。また彼らは単なる占い師、魔術師ではなく、ここでは「博士たち」すなわち星の動きで真理を探究する学者として紹介されている。

彼らの出身地と思われる「東の方」アッシリア、バビロン、ペルシアは、かつてユダヤ人が国を滅ぼされ、捕囚として連れて行かれた地である。それゆえ、その地方の人々はユダヤ教やその救い主を待ち望む信仰についてもかなりの知識を得ていたことであろう。

古代の天文学者である彼らは、この時、東の方で不思議な星が昇るのを見、それが特別なしるしであること、ユダヤ人の王の誕生であることを知り、はるばるユダヤの首都エルサレムまで、お生まれになった方を求めて、礼拝しに来たのであった。

この博士たちが見た星はどのような星であったのか。いろいろな説がある。BC12年にハレー彗星が地球に近づいたとか、BC7年に木星と土星が接近して強い光を放ったとか、いろいろ言われているが、9~10節の記述によれば、それはこのときだけに現れた奇跡的な特別な星であったと理解しなければならないであろう。そして私たちはこの星の正体を調べるよりも、この星の役目を知ることの方が大切である。

ではその役目とは何か。それは、東方の博士たちをまず旅立たせること、次にイエスのおられる家に導くということであった。
[3]「これを聞いたヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった」
　ユダヤ人の王として生まれた幼子を捜しているとの知らせがヘロデ王の耳に届いたとき、彼は動揺した。なぜか。それは自分の地位を脅かす者が出て来たことを知ったからである。ヘロデはユダヤ人ではなく、エドム人の血を引くイドマヤ人であり、ローマ皇帝に取り入って、ユダヤの王としての地位を手に入れた人物であった。彼はエルサレムの神殿の再建工事に力を入れたり、ユダヤに平和を維持し、秩序をもたらしたという点では立派な王であったが、一方では彼は猜疑心が人一倍強く、誰かが自分の地位を脅かすと思えば、身内であってもすぐに殺してしまうような人物であった。彼は自分の妻とその母を殺し、三人の息子も殺してしまった。彼をユダヤの王に任じた時のローマ皇帝アウグストは「ヘロデの息子であるより、ヘロデの豚である方が安全だ」と言ったという。このような人物が将来王となる子どもが生まれたという知らせを受けたとき、どのような反応をするかは想像に難くない。彼は恐れ惑い、そして殺意を持ったのである。そしてエルサレム中の人々も動揺したが、それはヘロデの抱いた恐れと同じではなく、ヘロデが自分の王位を脅かす者を未然に防ぐために、これから打ってくるであろう残忍な処置を恐れたのである
[4-6]「王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。彼らは王に言った。『ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。【ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。】』」
　祭司長、律法学者たちはヘロデの問いにすぐに答えることができた。彼らが引用したのはBC8世紀のイザヤと同時代の預言者ミカの預言で旧約のミカ書5章2節であった。700年以上前になされたミカの預言が実現したのである。このような預言(イエスに関する預言はその誕生から死に至るまで旧約聖書において多くなされている)の実現として世に出て来るお方が他にいるだろうか。
　彼らは聖書学者としては申し分なかったが、その知識を行動には移さなかった。彼らは聖書の預言から、イスラエルのまことの王がベツレヘムに生まれるということを知ってはいたが、自分たちから訪ねていくということはしなかった。なぜか。それは彼らがヘロデ王の怒りを恐れたからである。ヘロデ王を無視して、救い主として

生まれたお方のもとに行き、礼拝などをするならば、たちまちのうちに殺されてしまうかもしれない。彼らにとっては聖書の預言の実現として救い主がこの世に来られたということよりも、自らの立場の保身、生活の安定が大事だったのである。

[7-8]「そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。そして、『行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから』と言って、彼らをベツレヘムに送り出した」

ヘロデは幼子を拝むどころか抹殺する計画を立てているのである。

[9-10]「博士たちは王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ」

この星は彼らを導いて進み、ついに幼子のいる家の上にとどまった。これはどう見ても普通の星の動きではない。この時限りの超自然な出来事であったと言わざるをえない。この出来事の背後に神の働きがあったのである。東の国で見た星を頼りにはるばるユダヤのベツレヘムまで来た彼らは間違っていなかった。主なる神がユダヤ人の王として生まれた幼子はこの家にいると、星を用いて、わざわざ示されたのであり、ついに幼子に会えると彼らは期待し、この上もなく喜んだのである。

[11-12]「それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。彼らは夢で、ヘロデのところに戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った」

ついに彼らは幼子に会うことができた。そしてひれ伏して礼拝した。彼らは自分達の国にある様々な宗教の偶像神に新たに加わったユダヤ人の生ける神として礼拝したのであろうか。それともそのような思惑を超えて、この方こそまことの神の子、救い主、ユダヤ人の王として来られた方であるとの信仰をもって礼拝したのであろうか。彼らが真理を探究するまことの学者であるならば、答えは後者であろう。

彼らが献げた黄金は王にふさわしい最も価値ある宝、乳香は神にささげる神聖な薫香、没薬は香料や薬として用いられ、死体の埋葬時にも防腐のために体に塗られた。それぞれは王権、神権、十字架上の死を象徴するものとして世の罪を贖う救い主キリストにふさわしいものであった。そして彼らは夢でヘロデのところに報告に戻らないよう警告されたので、別の道から自分の国へ帰って行った。ヨルダン川を渡ってメソポタミア方面へ北上して行ったか、または地中海沿いの道まで下って

北上して行ったか、それは分からない。彼らは星に導かれて救い主に会い、夢によって教えられて帰路についた。これらはすべて主なる神の導きによるものであった。

今日の箇所ではイエスの誕生について三種類の対応が起こったということを知ることができる。

①ヘロデ王は憎しみと敵意をもって対応した。彼は自分の王としての地位を脅かす者に対して容赦しなかった。それで彼はユダヤの王として生まれたイエスを抹殺しようとしたのである。

②祭司長や学者たちは救い主誕生に無関心であった。彼らは旧約のミカ書から救い主がどこで生まれるかも知っていたが、いざ救い主が誕生したとの知らせを聞いても、行って礼拝しようともしなかった。彼らは現在の生活に満足しており、それを妨げられたくなかったのであろう。彼らは自分の思い通りの生活をしようとするとき、イエス・キリストが邪魔になるのである。

③東方からの博士たちは、星に導かれて遠い東の国から救い主に会いにユダヤにやって来た。そしてユダヤの王、救い主として生まれたイエスを礼拝し、最上の宝を献げたのであった。

ここにおいて私たちはイエス・キリストが本当に尊ばれなければならないユダヤの国の人々からは殺意や無関心をもって迎えられ、異邦人である東方の博士たちからは礼拝や贈り物を受けるという逆説的な事実に気づかされる。私たち信仰者はヘロデ王や祭司長、律法学者のような生き方をするのではなく、この東方の博士たちのように、熱心に救い主を捜し、見出して、礼拝するという信仰の姿勢をもって歩んで行かなければならない。それこそが私たちの最上のものを献げる生き方、神に喜ばれる信仰者としての生き方なのである。→ローマ12:1～2，Ⅰコリント6:19～20